東南アジアの船旅 (4) 最終回

大阪大学経済学部　長　浜　穆　良

ベンガル湾からマラッカ海峡へ
（3月7日～3月10日）

マドラスからベルガル湾を東進してニコバル諸島を横断するには16ノットで約40時間かかる．7日の朝8時にマドラスを出航して3月8日はベンガル湾のまっただ中である．航海中，団員はきびしい時間表に従って行動することになっている．6時起床，6時30分朝のつどい，6時50分～8時30分清掃・朝食・その後，午前中3時間の授業，午後は2時間，クラブ活動と班別活動，午後5時15分夕べのつどい，5時30分～7時30分，清掃・入浴・夕食，その後自由時間，10時消灯．これが一日の生活時間表で，集合は5分前が厳格に守られている．

さて，3月8日の夕べのつどいは，わが生涯の最良の日であった．その10日ばかり前，教官が雑談をかわしているときに，だれかがその日が結婚記念日だと話したのにつられて「わたしは3月8日だ」といったのが，同席の教官の口から漏れていたらしい．夕べのつどいの司会は各班輪番制で10分あまりで済むかんたんな催しをすることになっている．私は突然，当日当番の第3班班長，蔦谷幸子さん（この方はわたしの自宅から2キロあまりの所にお住いで，当時すでに結婚しておられ，最近ベービ誕生）の呼び出しをうけ，全員の整列する正面の号令台にあげられた．「今日は長浜先生の結婚記念日で……」といわれるまでは全く予想もしなかったことなので一瞬ショックだったが，そこは年の功ですぐにずうずうしくも平静をとり戻した．

このせち辛い世の中に，人の好意は得難いものである．わたしは恥しさと，卒直に好意をうけなければならないという気持との交錯に耐えながら，満腔の感謝の念で祝福をうけた．第3班の女子団員から，レイと花束，それにインドネシア民謡の斉唱を贈られ，また，23班と17班の男子団員からは胴上げされた．その上，23班の男子団員は日本にむかって妻の名を2回も呼んでくれた．教官団からは留守宅に祝電を打って下さったそうだし，神戸の瓦せんべい一箱のプレゼントもあった．さらに，夜になって居室の方に団員の徳田敏子さん（京都）山田幸子さん（山梨）からプレゼントが届いた．胴上げで体はベンガル湾の空に舞いながら，身も心も青年の船に融けこんで私は本当に幸せであった．

3月9日．夕刻にはようやくスマトラ北部に達した．船は次の寄港地シンガポールに近づいていく，というよりはこの頃には教官の中に軽度のホーム・シック患者が発生しだして「だんだん日本に近づきますなあ」という人もあらわれた．私はそれ程ではなかった（と思う）が，同室の清水国雄先生（当時，横浜市教育委員会指導主事）のすすめで，家族に送るために自分の声を郵送用テープに吹き込んだ．こういうアイデアは清水先生独特で，横着者の私には思いもつかない．そもそも，清水先生と同室ときまったときに私はしめたと思った．英会話担当の清水先生から不得手な英会話をただで習おうと思ったのである．しかし，これは虫のよすぎる話で，結局，計画だおれ．だいいち，清水先生くらいきちょうめんで行動の敏速な人を知らない．10時就寝なのに9時にはカーテンを閉めてお休みである．私など12時前に寝ついたことはほとんどなかったもんだ．睡眠が足りているせいか昼間は潑溂としておられる．私は昼あんどんだ．朝はかならずトマト・ジュースを飲まれる．私にはこの，かならずとか規則的にとかいうのができない．よくも52日間も同室でごしんぼう下さったものと感謝に耐えない．

スポーツ・デッキでの
バスケット・ボール

10日には，マラッカ海峡もだいぶ狭くなってきた．狭いといっても何10マイルもあるのだが海図をみると実際に航行できるところはおそろしく狭い．長い棒を何十本も海峡に沿って並べたように，バンクとよばれる浅瀬がたくさんあり，船はその溝のようなところを進むのである．ペルシャ湾に石油をとりに行く大型タンカーは危険なので帰りはここを通れない．ジャワ島の南をまわって，バリ島の東側のロンボク海峡を北上するのである．

大型タンカーで思い出したが，日石丸のような長さ3百何十メートルもある船は全くたいへんらしい．30何万トンもある船に4・50人しか乗っていない．港々に女あり，というようなマドロスさんは昔の話である．船は昼夜3交替だからワン・シフト10数人の勤務で，ブリッジにの勤務で2・3人厨房に2・3人というふうに散らばると淋しいものである．近頃，船員の教育・訓練にもふた通りの考えがあるらしい．あらゆる事態に対処しうるために昔どおりの激しい訓練の必要を主張するものと，技術進歩に合わせた合理的な教育とのふた通りである．海外旅行を兼ねるつもりで乗船して，週刊誌の話題にもなったスチューワデスも，彼女たちの期待に反して，日本出航後ペルシャ湾で石油を積み込み，ふたたび鹿児島湾の喜入（きいれ）に戻るまで一度も上陸できなかったとのこと．これほど合理化されると人間性を保つことがむつかしくなる．いまやヨーロッパむけのコンテナ船は30ノットをこえる，航空母艦なみのスピードで快走している．しかし，やはり船旅には15ノットぐらいがよいのではなかろうか．

シンガポール（3月11日～3月15日）

潮と風の具合がよく，シンガポールには予定より7時間もはやく着いた．朝の7時に港外に投錨，コレラ汚染地区マドラスからきたので全員検疫．午後2時30分着岸．入れ替わりに同じ岸壁からオランダの豪華客船「ロッテルダム号」(36,845総トン)が悠々と出航．このときばかりはわれわれ自慢の「さくら丸」も少々貧相な感じで，その上，他の国々とはちがい，ここでは出迎えもまばらであり，ただスコットランドふうの風笛隊の観迎があっただけである．各国の歓迎に馴れていい気になっていたわれわれの頭はここで少々冷やされたわけだ．

シンガポール．1965年マレーシアから独立．淡路島ぐらいの大きさの島に200万人が住み，7割5分は中国系人，マレー系は1割5分．所得水準はわが国に次いで東南アジアではずば抜けて高い．中国系の女性は日本の女性とほとんど区別できないが．脚の線が美しいそうである．船内交歓会にはシンガポール側の女性もゆかたを着て参加したので全く区別がつかなかった．「ウイル・ユー・ハブ・サム・フード」とすすめたところ「私，日本人でございますの」「や，どうも失礼申しました」……どうも女性に関心を持ちすぎる傾向があって大失敗．

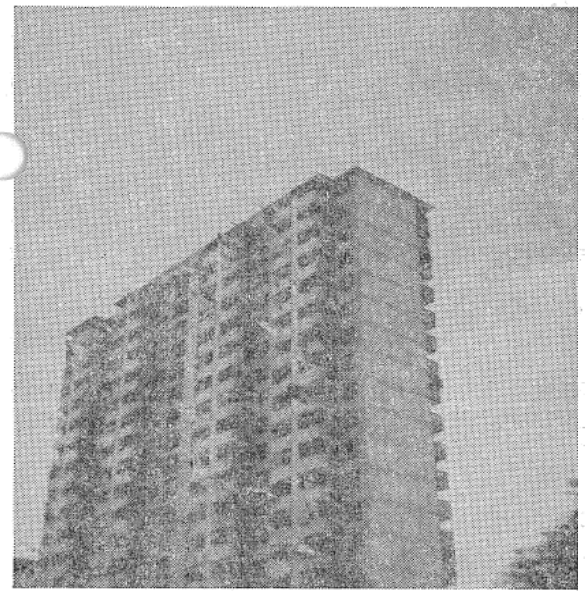
シンガポール港は出入船舶トン数では世界第4位，荷扱い量では第3位，これが150年前には人口数百人の漁村だったとは思えない．海岸どおりはとくに美しく，英国風の建物が多い．英語，北京官話，マレー語，タミール語が公用語である．約4年間，日本軍に占領されていたので日本語のわかる者もかなりいるはずである．英語は小学校1年から必修だから，子供たちには英語が通じる．教育は義務ではなく権利と考えられたおり，大学でも無料に等しいそうであ

る．といって誰でも行けるわけでもないだろう．ともかく文旨は皆無といってもよい．直観的にもたしかに豊かで清潔な感じの国である．

デュロン工業団地（3月12日）

この日は経済班を引率してデュロン工業団地とその中にあるデュロン造船所，国立製鋼所を見学する予定になっていた．ところがこの予定というのが細部については受入国側の都合でしばしば変更になる．この日も朝の出発直前になって両工場とも都合わるく，工業団地の事務所と野鳥公園だけの見学に終わりそうな気配がみえた．それでは経済班の見学にはならない，何とかならないかとかけ合ってみると案外かんたんに話がついて，結局，造船所と，マグロウヒル極東出版社をみることになった．

船海中，東南アジア事情担当教官は，次に寄港する国の事情を船内で講義するのであるが，何しろ話す方も行ったことのない国のことである．私は経済事情担当で，一国の経済事情を示す事柄の平均値を話すのだから，話したことの妥当性を目でみて検証される程度はそう大きくはないが，地理事情教官担当の場合など「聞くとるでは大違い」ということが起りかねない．私の場合もシンガポールの場合だけは，多少聞いてはいたものの，工業化政策にほとんど重点をおかなかったので，まのあたりに大工業団地をみて内心申しわけない気持だった．もっとも，このときには，まだ大部分が造成地のままで，とくに周辺部は目下造成中であり，人っこ1人いない砂漠のような状態であったので罪は軽いかも知れない．



20階建の，典型的なシンガポールの公営住宅

デュロン・シップヤード会社は石川島播磨重工とシンガポールとの合併会社で10万トンのドックがあり，修理専門である．ちょうどフィリピンの6万トンの船が船底をこすったとかで修理中であったが，団員で私のクラスに属する辻博君の勤務先が「いしはり相生工場」であり，水を得た魚のように大いに面目をほどこした．ヘルメットをかむり先頭に立って説明する彼，まことに頼もしい勤労青年である．こんな彼を若い女性がほっておくはずがない．案の定同じクラスの中尾節子さんに射落されて今年の2月19日にめでたくゴール・イン．披露宴に招かれて幸せなカップルを拝見したが，もうおめでたも近いという噂である．

デュロン・シップヤードは修理工場だが，すでに設立ずみで今年から新造船を送り出す会社すなわちデュロン・シップビルダーズも建設されている．この他，デュロン地区には帝人，ブリジストン，トッパンなども進出している．シンガポール島内には他にも工業化促進地区がありクランジ地区は木材業，他の諸都市は軽工業デュロン地区は重工業と軽工業というように開発方針がきまっている．

デュロン地区内の一区域はかなりの規模の住宅ニュータウンになっている．政府は住宅政策には非常に積極的で大使館筋の説明では人口の30パーセントは政府の造った住宅に住んでいるようである．低家賃住宅を含む住宅政策はシンガポール人の誇りであり，私も何人かの人が誇らしげに語るのをきいた．1DKなら2・3千円の家賃らしい．3DK（約100平方メートル）の買取りが2百万円というから，のどから手の出るような話である．与党の人民行動党は一院制の全議席を確保し，もともと社会民主々義を掲げる左派政党（保守政党という人もある）であるから，社会福祉政策には力り入れているよ

うである．

この日はこのあと広大な野鳥公園で原色鮮やかな珍鳥をみたり，最新式の印刷工場を見学したり，シンガポール港湾局を訪問したりでかなり忙しかったが，とにかく午後4時には無事帰船し，さて，夜は待望の自由行動となった．ハード・スケジュールに対する忍耐も限度にきているし，各人の自覚も十分信頼しうる程に高まっているので，責任ある自由行動が許されたわけだ．

とはいうものの，夜に行く所というのはだいたいきまっている．教官5人が連れだってタクシーをチャーターし，ショッピングに行くことになった．

「南興」という皮製品の店は日本人にはよく知られている．支配人は日本人なみの流暢な日本語を話し，数人の女性店員もみなかんたんな日本語を話す．胸のネーム・プレートには「千恵子」などと日本名が記入されている．パンフレットなどの宣伝文もみな日本語である．ちゃんとした店であるから，そう値引きはきかないが日本で20万円位のオーストリッチのハンドバッグが2百米ドル位である．みやげ物屋に殺到する日本人，というのは世界中でひんしゅくを買っているらしいが，期せずして自分もその一翼を担った1人である．きくところによると皮をなめす技術はイタリーに依存し，また金具には西独のしるしがついている．

この晩はタクシー運転手の陳利輝さんの案内で「都市飲店」という中国料理店で教官5人共々夕食をとることにした．制服を着たウエイトレスのいる清潔な店である．われわれはポート・スエッテンハムの蟹を思い出し，その注文をした．この蟹はどこからくるかときいてみるとまさしくポート・スエッテンハムからと答えたのには驚いた．そんなに遠くでなくてもいそうなものである．そして，この蟹たるや，大きさと味は半分，値段は2倍という感じのものであった．ともかくも，久しぶりにくつろいだ夜であったし，またタクシーの運転手氏と友達になれてなかなか愉快であった．そこで，この運転手氏のことにちょっと触れてみたい．

陳利輝氏

彼はタクシーの運転手である．最初に彼が発した言葉は「いっぱついくか」という日本語であった．港にたむろするタクシーの運転手としては当然の営業用語である．そこで私は下手な英語で「われわれは無粋なセンセーであるがゆえにだめである。」と通訳した．陳氏は1952年に大陸から香港にわたり，それからシンガポールに流れついたという．子供が5人だから生活は苦しいとのこと．しかし，クルマはピカピカに磨かれており，エンジンは快調である．身だしなみもよく，頭髪には櫛の目が揃い，シャツにも垢一つみられない．彼も偉いと思うが奥さんもしっかりした人なのだろう．

彼は1日24時間働いているといっていた．非常に折目正しく，食事を共にするように誘っても丁重に断わる．再三すすめて，やっと同席するのである．運転席の横には「日本語読本　巻一」なる本がおかれていた．上段に中国語が書かれ，下段にその日本語がひらがなで書かれている本で，独学でやっているのである．今年出した年賀状に，私は英語の構文，つまり，主語，動詞，目的語の順に漢字ばかりの手紙を添えて出したところ次のような返事がきた．この手紙の意味は普通の日本人ならだいたいわかると思う．

「長濱穆良先生台照　上月接到　尊駕肖像及賀片各一張敬領万分感謝　本月十五日正是中国新年（そうがつ）現在奉上数語略表寸志　恭祝

貴府諸位新春納福万事如願

足下之日本語祝詞吾完全明白会意　大抵日本和中国之漢字源出一家　意義接近只是読音差別而已。

吾現今有意学習日本語文　苦無良師　足下若有余暇祈多通信教吾　来信請用日本文及英国語文各一篇　其中意義要求相同

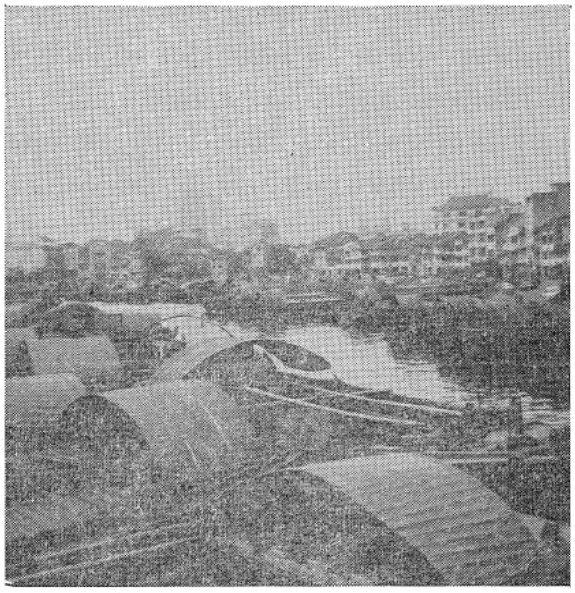
蓋年足下偕諸位先生光臨敝国吾縁因職業関係不能盡地主之誼　導遊各処風光至深歉意　今後若有友人来新加坡観光旅行　祈先代通信介紹便作迎逅　どうもありがとうございます　祝　陳利輝 1972.2.5.」

非常に美しい楷書でしたためられており，賀状には，「恭祝　貴府新年快楽　萬事如願　陳利輝頓首　但願真摯友永誼恒不息　万古長存」とある．私の手紙の意味が通じたらしいのと同様に陳氏の手紙の意味も完全に解る．「地主之誼」の意味は，はじめぴんとこなかったが，地元の人間としての礼儀という意味であろう．お互いに意思疎通が叶い，表意文字のありがたさをしみじみ感じたものである．

シーメンズ・クラブ，ホテル，バー（3月13日）

3月13日は昼間はシンガポールの子供たちに船内が公開され，われわれは案内係をつとめることになった．朝の9時から夕方3時まで，ひっきりなしに小学生の団体が先生に引率されて来船し，大入り満員である．船内には日本の技術と文化を紹介する展示場がいくつもあり，見学順路を予め定めた上で，誘導したり説明したり大わらわ．ほとんど中国系であるが，みな非常に英語がうまい．家では中国語を使うのであるから習った言葉である点では日本人の英語と同じなのに実にうまいのである．

さて昼の仕事も無事おわり，この夜は鈴木捷船長，上滝昭六一等航海士に夜の散索に招待された．上滝一航は，当時すでに甲種船長資格を持っておられ，現在，日産専用船「神奈川丸」



シンガポール河河口のはしけの群

船長である．この船はついこの間，つまり47年10月5日，その3日前にオープンしたばかりの横浜の新杉田埠頭に横づけされた．私は大阪からこの船をみせていただくためだけに新幹線でかけつけたのだが，船側から世界の洋酒を並べた接待をうけ，久しぶりに船の臭いをかぎ心が安らいだ．その時，船長室に食事を運んできたボーイさんが，何と「さくら丸」で50日間私の世話をしてくださった森勝二郎さんである．暫くして「これが私の二世です，これから家内と買物に出ますので失礼します」といって抱いてこられたベビーはパパに似て愛くるしい，目の大きい赤ちゃん．明日の出港後，2・3カ月逢えない奥さんとのデートであろう．「いってらしゃい．お元気で．さようなら。」とお別れした．ちょっと話は「神奈川丸」へ脂線してしまったので，ふたたびシンガポールへ戻ることにしよう．

キャプテンとチョーサー（チーフ・オフィサーすなわち一等航海士）はさきにシーメンズ・クラブで待っているとのことで私と星村先生，折笠先生とは波止場に巡回してくる日本人船員のためのバスで都心のシーメンズ・クラブに出向いた．シンガポールのシーメンズ・クラブは日本人船員専用のものとしては世界でも数少ない（たしか3カ所のはず）ものの一つである．かなりの広さを持ったフロアーにみやげ物のコーナー，バー，ロビーがあって，くつろげるようになっている．マリリン・モンロー愛用の香水「シャネルの5番」は，日本で6千円ぐらいのが2千円で買える．ここで買った黒檀の象はいま，わが家に飾られて，こうしてペンをもつ私の目の前にある．

「それでは御案内しましょう」ということで私どもはマレーシア・ホテルに向い，ここで色とりどりのイルミネーションに輝く噴水に面したレストランでビールの御馳走になった．国際的な観光客が多く，華やいだムードにみち，いつまでもひたっていたいようなふん囲気であったが，鈴木船長は後は上滝一航にまかせて船に帰えられるとのこと，一同は，来たクルマで船に向い，途中，船長を除く全員はクリフォード

波止場前の「セラ・バー」で降りた．船長を船に送るクルマは，船長を送り届けるとふたたび戻って，われわれが遊びおわるのを待ってくれるそうである．

「セラ・バー」はバー・セラー（Cellar 地下室）とよばれるべきなのに，なぜか「セラ・バー」である．50人位はいれるんだろうか，かなり大きいバーである．われわれ4人に1人ずつホステスがついてサービスしてくれる．私の横に座ったおばさんはなかなか美人である．（美人というのは私の癖）．マリーさんという．上滝さんとはじっこんの間柄らしい．船の都合で6年ぶりということもあれば半年ぶりということもあるそうである．「マリーさんは名前から察するにクリスチャンですか」「そうよ，カトリックなの，でもあたしはわるいカトリックなの」こんな会話ではどうも酒がまずくなる．

セラ・バーのホステスは日本のホステスのようにお化けのようにぬりたくってないし，頼みもしないものを勝手にとってバクつくような下品なこともしない．料理も実質的である．チップは直接手わたすことになっている．1人3ドル（3シンガポール・ドル，3百円）わたせばいい．きわめて健康的なバーである．もちろん，どこの国でも裏の裏の裏がある．しかし，シンガポールはたてまえはきちんとしている．若者の長髪やカラーシャツは禁止されている．クワラルンプール同様，ちりやたばこの吸がらを捨てると5万円の罰金である．単車にのるときは同乗車もヘルメットをつけることになっており実際にもそれが守られている．まあ，こんなことを書いていると通人からはシンガポールのどこをみてきたのかと笑われることだろう．もちろん覚悟の上である．

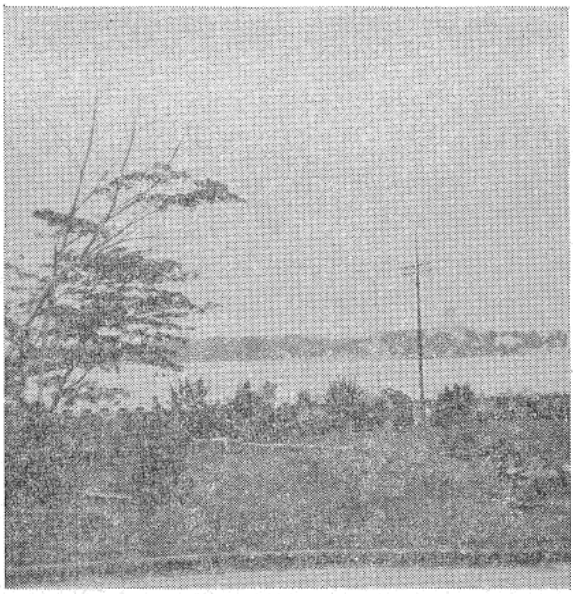
寺沢先生とともに（3月14日）

この日は寺沢先生と行動を共にすることになった．まずタクシーをチャーターし（1日3千円ぐらい），中央郵便局で用事をすませ，マウント・フェーバーとよぶ丘の上にあがってシンガポール港の展望を楽しんだ後，さらに地図をみながらデュロン地区を砂ぼこりをあげて迅走し，最初の目的地，中央魚市場に到着した．衛門のところで「われわれは日本からきたのだが見学させてもらえないか．こちらの寺沢先生は geometry の先生である。」と許可を求めたとたん，それまでうさんくさそうにしていた門衛が「なぜ幾何学の先生が魚をみにきたんだろう」と戸まどった顔をした．そのすきにわれわれはどんどんタクシーのまま入りこんだのだが，実は寺沢先生は geography の先生である．地理学の先生をまちがえて幾何学の先生にしてしまったのである．魚市場は朝が早いのか，魚は一匹もいず，空箱と魚籠ばかりがころがっていて失望した．魚をみることの好きな私と，人文地理学的見地から期待していた寺沢先生とは2人ともがっかり．

この寺沢先生はなかなかの豪傑で，船中では日本で100箱ばかり仕入れていった吸口つきのたばこ「朝日」で通し，入浴後は船中で着物一点張りであった．寺沢先生はＮＨＫの「中学の勉強室」の講師であり，今年は担任の高校3年のクラス45名中，現役で男5名女5名が東大に入ったそうである．日本地理学会々員，日本男子の典型で，知っていてもめったなことで英語などを口になさらない．地図をみながら，タクシーの運転手に日本語で指図される．私が頼りない英語で「プリーズ何とか」いってもらちがあかないとき，寺沢先生がただの一声「ストップー」とどなるといっぺんにクルマが止るんだから嫌になる．運ちゃんにもどちらが上等の人間か直観でわかるらしく，何となく寺沢先生に対して敬意を払っているようである．世の中とはこんなものかも知れない．

次はジョホール水道にいこうということになり，魚市場をあとにして島の中央部を北上し，途中沿道にはブキテマの街，ブキテマ高地などが望見された．戦前・戦中派なら激戦の地として記憶にあるところである．

ジョホール水道は1824年にシンガポールが完全にイギリスの植民地となった後に，マラヤ半島から分離するために建設されたもので，このときからシンガポールは島のようになったわけである．1キロたらずの堰堤によって対岸のマ



ジョホール水道，むこうは
マレーシアのジョホール州

レーシア・ジョホール州と結ばれており，その上には鉄道と車道が設けられ，頻繁にクルマが往来している．出入国手続きもかんたんらしくちょうど高速道路の料金徴収所のようなところで，よれよれの定期券のようなものを，ちらりとみせるだけでどんどん通っていく．こちらから歩いて渡ってもとがめる者のないようなようすである．ちょうど日曜日で小さな桟橋の先端に釣をする子供たちがいたので，「何を釣ってるの，おじさんも釣が好きなんだ．」と近寄ってみた．水は澄んでいて，5・60センチあまりのうつぼのようなのが，ゆらゆら泳いでいる．みたこともないしろ物だが，子供たちには珍らしくないらしく，みむきもしない．

腹が減ってきたので寺沢先生と2人で食堂を探すことにした．この頃から立小便をしたくなってきたが人目が多く実行するわけにもいかない．道路沿いの小さな食堂はどこもみな昼の休憩中という感じで，くい物はないがビールなら出すという．やむなくビールを飲むことにしたが，入れる一方で出さないものだからだますます圧力は加わってくる．ふと卓上の漢字の新聞をみるともなくみると，「近頃，日本人観光客の行儀のわるさは目に余るものがある．いたる所で塵を捨てるし，立小便をする．日本政府も放置しているわけではなく，最近，運輸省では観光エチケットのパンフレットを数万部印刷して配布しているとのこと」という記事が目にはいった．食堂の中国系人には英語は通じない．いかにしてこの困難を克服したかは御想像におまかせする．

ビールを飲んだ店を出て，ふたたび食を求めてさまよううちに，ついに店頭に，あの名古屋のきしめんをゆがいておいてあるのに出くわした．日本から輸入したんだろうか，全く同じやつである．さっそくはいって，「あれをくれ，あれはきしめんだろう．日本から輸入したのか」と聞いてみると，「さにあらず．あれはいいめんなり．昔からある。」との返事であった．

空腹を満たしたあと，汽車で帰りたかったが国境付近に駅はなく，ブキテマが最寄りの駅らしい．バスにのるのも一策と，親切な中国系人にていねいに教わり，現地の人にまじってバスにのり，シンガポール終点まで行くことにした．汽車の方はいつか実現したい．バンコック発の国際特急列車はマレーシアの保養地ペナン，首都クワラランプールを経て，シンガポールまで48時間かかる．乗りはしなかったが，この列車の使用済の切符はもらってちゃんと保存してある．さて，バスの終点はごたごたした中国人街のまん中で，さすが地図持参の地理学者でも見当がおつきにならないらしい．そのうちに雨が降り出し，方角について意見が分裂するまでにいたった．だが，このあちこち迷ったことが幸いして，物見高い2人の研究者は，途中，ヒンズー寺院や中央市場をみてまわり，方角の意見はわかれたが行動は終始ともにして，無事帰船することができた．そして，方角は正の方向にπ回転だけ私の誤りであったことも白状しておかねばならない．

この日の夜は，ふたたび陳氏のタクシーをチャーターして，例の「都市飲店」に向ったが，満員のため陳氏の懇意の店に出かけた．この店は典型的な庶民の中国料理店で，調理は道路側の2階の席からは真下にみえる路上でやっている．有名なシンガポールの屋台店の一種である．この食堂では陳さんに乞われるまま，私の日本の住所を書いて渡すと，期ぜずして，ちょっと

した話題をふりまくことになった．日本人が漢字を使うことはよく知られているにもかかわらず，現実に目の前ですらすら書かれると大変なおどろきであるらしい．陳さんは私の書いた紙片の漢字を食堂の女の子にもみせてまわり，みな一様におどろいている．なるほど住所と氏名なら漢字ばかりである．そこで暫らくは日中双方の漢字の異同などで話が大いにはずみ，陳氏との友情はいよいよ深められたわけである．

シンガポールは小さい島国であり，自由時間も多かったので見聞したことも多く，話したいことはまだまだあるが，紙数の制約もあるからぼつぼつ切り上げなければならない．翌日の3月15日も午後の昼食会までは自由なので，またまた陳さんのタクシーで東部のチャンギー方面を見物に出かけた．二葉亭四迷の墓には参らずじまいだったが，英空軍基地，高級住宅地区，白砂青松？の海岸を廻った．シーズン・オフなのか誰も泳いでいなかったが，私は思い出にぜひ泳ぎたいと思い，靴までぬぎかけたのに，シャワーはないし午後のパーティーに差支えますよ，と同行の先生方に説得され，やめてしまった．

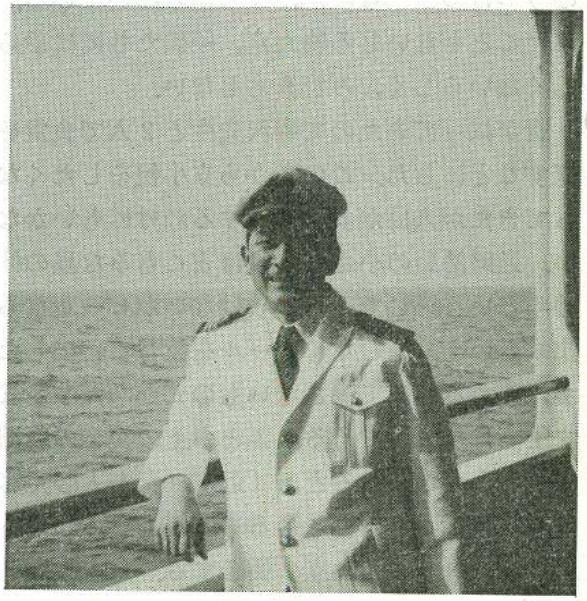
ここでも探求心旺盛な寺沢先生が「貝の家」なるものをみたいとおおせられ，かなり時間をくってやっとみつけたところは，われわれには猫に小判で，古びた貝殻がたくさん並べられているにすぎないような印象であった．何とかいうイギリスの婦人がこつこつ収集したもので，もちろん専門家がみれば珍しいものが多いにちがいない．

そうこうするうちに時間も経過し，街に戻り「トロピカーナ」という，日本の観光案内にも出ている有名なレストランで高級中国料理を御馳走になり，3時には帰船，夕刻6時にはいろいろと思い出の多い？シンガポールを出港したのである．最後につけ加えるならば，出港直前に今度の旅行で最もよいみやげ物を買うことができた．船内に見本を持ち込んで注文をとり，店に電話して出港まぎわまで船に配達された藤椅子である．背もたれ，肘かけのついた大きいのが1つ千円である．今，わが家に2つ持ち帰って愛用しているが，これは船旅でないとできない買物である．神戸に帰着したとき宛名を書いた荷札をつけておけば，荷物一切5百円ぐらいで家まで配達してもらえるのである．それから，いよいよ出港のとき，私は気づかなかったが，陳氏は埠頭まで見送りにきていたらしい．こんないろいろのことを思い出にしまいこんで船はいよいよ北上，次の寄港地，台湾に向かったのである．

高波と星空と（3月16日～3月19日）

ふたたび海ばかりの生活がはじまったが，全員シンガポールの疲れが出てがっくり，その上終日かなり波が高い．波高図をみると台湾南方は波高8メートルである．船はかまわずどんどん北上，われ物，身のまわり品をしっかり固定するよう指示があり，バンケット・ホールのテーブルも鎖で固定され，次第にものものしいふん囲気になってきた．不安と期待の交錯するうちに時間が経過していったが，低気圧は東方に去ったらしく浪はおさまってしまった．

あくる3月17日の夜は，これこそ生涯に一度しか経験できない満天の星空で，海上であるから全方向に全天の星がみられた．月の出ていない夜で一点の雲もない．午後9時50分，全員甲板に出て，上滝一等航海士のマイクによる説明にきき入った．ただ黒々とした波と満天の星．



長浜一等航海士？

南の方向，仰角10度に南十字星が金のロザリオの如く輝き，そこにはじまる天の川にシリウス大オリオンとつづく．赤いベテルギウス，青のリゲル，その間のオリオンの劔（いわゆる三つ星）．反対側，すなわち船の進む方向のレーダー・マスト上方には北斗七星，その左下方仰角10度には北極星がみえる．船は北極星に対して右10度の方向に進んでいる．南十字星と北極星とを南北に見分け，全天の星の下に，青年の船の全団員が嘆声をもらして宇宙の神秘を思ったのである．

この頃から全団員は報告書作成に忙しく，教官側もその添削指導で多忙となり，ベッド・ランプで12時すぎまで仕事をすることもあった．しかし，昼間は船長から天文航海クラブ員（私は顧問教官）へのお茶の招待があったり，またこれとは別に教官一同が船長の招待をうけて船にまつわる話とか海外事情などをきいて楽しく過すこともあった．船が北上するにつれて気温は少しずつ下っていく．あす，3月20日はいよいよ最後の寄港地，高雄入港である．

高雄入港（3月20日）

朝7時高雄着，半袖では肌寒く，もやがかかって日本的な感じである．4時着岸．日本の地方都市，たとえば和歌山港に似ている．人口82万人，台湾第2の都会で，第3位の台南47万人よりはるかに大きい．

夜は高雄第1ホテル，華王大飲店で歓迎晩餐会があり，いわゆる京劇，台湾でいう国劇を鑑賞した．おそらく激しい修練を要するであろうような柔軟なとんぼ返りなどの曲芸的要素と舞踊的要素，その上独特の発声法によるせりふの節まわし，これを可憐な中国娘がいともあでやかにやってのける．立役の衣装はそれこそ大だんびら，くま取りも歌舞技の何倍も大げさであり，見得をきるところなどは歌舞技的である．私ははじめてみるだけに，しかも咫尺の間にみただけに非常に感銘深かった．

台南と曽文ダム（3月21日）

台南は昔の都で日本の京都にあたる．われわれの見学した赤崁楼は1624年から1662年の間のオランダによる支配の城跡である．民の時代の末期に福建省の厦門（アモイ）からやってきて台湾を解放し，ここを都としたのは鄭成功である．鄭成功の父は九州平戸に滞在した貿易商であり，母は平戸の土豪田川氏の娘である．彼は4才まで日本で育ったのであり，半分は日本人である．彼にちなんで成功小学校，成功大学などがある．このようなわけで台南は非常に親日的である．

いったいに台湾南部はいろいろの意味で親日的である．台北は中央政府があり，台湾人からすればいわゆる外省人（人口の2割）の支配するところ，したがって北京官話でないと肩身が狭い．ところが台南までくると外省人でも福建なまりの台湾語で話す方がもてる．台湾は日本統治時代には，地上戦斗の行なわれなかったところであり，終戦後になって大陸からきた中華民国政府軍がはいってきたのである．もちろん，このような旅行者の浅見を以て一般化はできないが，ときおり日本人とみて老人から話しかけられたりするとき，何かそのような印象が強い．日本統治時代の罪悪も明らかにしなければならないとは思うけれども．

赤崁楼の隣にある成功小学校はちょうど日曜で運動会が催されていたが，その風景は日本の運動会の風景そのままである．殊に男子生徒の

鄭成功をまつる廟

赤い運動も日本帽と同じ，ただ女の子が全部黒のタイツをはいているところがちがっていた．

赤崁楼のあと，われわれは阿里山に発する水系に建設中の曽文水庫（ダム）の見学にむかった．その少し手前には40年前，日本人技師の設計・監督になる烏山頭ダムがある．10月から翌年3月までは渇水期なので工事は最盛期でありちょうど堰堤の基礎を固めているところで，35トン積ダンプカーが広大な工事現場を蟻の群のように動きまわっていた．設計コンサルタントは日本工営，施工顧問はこれも日本の鹿島建設である．総工費60億台湾円（540億日本円），その五分の一は日本からの借換である．

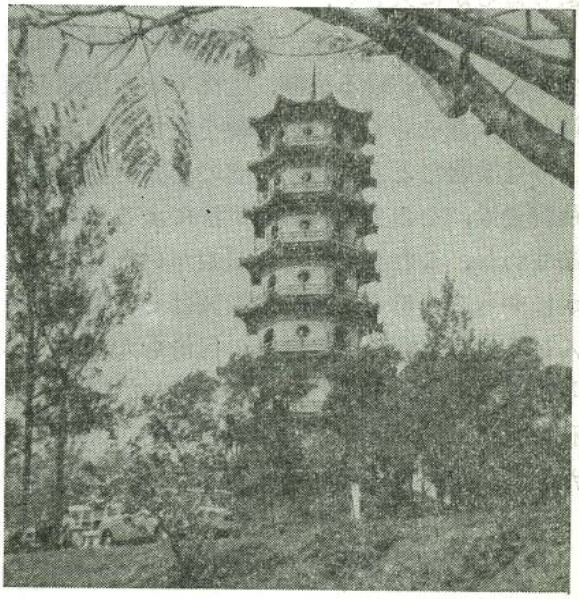
台湾最南端へ（3月22日）

3月22日はバスで台湾最南端のウーランピー岬を訪れた．高雄から100キロはあるであろう．観光地になっている南端や，その少し北にある．広大な植物園，懇丁公園も楽しかったが，もっと目を楽しませてくれたのは沿道風景であった国道両側に延々とつづくマンゴーは花盛り，本当に何キロもつづくのである．シーズンには1本の木に何百もの実がなる．見事なバナナ畑があらわれると，また行けども行けどもバナナ畑きわだったシーズンの変化はないから，水と土壌の肥沃度を考えて，だいたい3年位を1周期としていろいろのものを栽培する．これを横断的にみるわけだからあらゆる作物をいつでもみることができるわけである．

われわれのような団体が一挙に使用できる手洗いはないので，途中，予め依頼してあった屏東県枋山国民小学で休憩，私は粗末ではあるが青年の船のペナントとバッジを持って校長先生に挨拶とお礼に行った．英語で挨拶とお礼を申し述べたのに対し，席をすすめられ，少しのなまりもない立派な日本語で「どちらからおいでなりましたか．大阪ですか．大阪は工業都市ですね」などと労をねぎらって下さった．小柄で温顔ではあるが教師らしい風格のある先生であった．

この日は帰船後，高雄在住の知人，呂信助氏の招待をうけていた．呂氏は台湾大学在学中，同大学に留学中の日本人との交換教授により，日本人と同じ程度の日本語をものにしており，敬語の使い方も完璧である．呂氏は大阪大学の大学院で研究し，そのとき私と識り合ったのだが，「さくら丸」入港時には税関吏として，まっ先に検疫通関手続きのため乗船してきたのである．呂氏は許しをえて私と同行した広部・寺沢両教官共々私たちを自宅に案内して奥様と坊やを紹介され，その後，克林ホテルでの夕食に誘われ，またすばらしい日本語を話す，旧制高雄高等女学校出のママさんのいるバーに案内され，あるいは珍しい中国式の寺，三山国寺などの見物をさせて下さった．途中，私は路上の本屋で愛読書「紅楼夢」の原本を入手することができた．私は思う．目下，台湾とは音信は途絶えているが，いつかは必らずや呂氏との旧交を温め，厚情に報いる日のあらんことを．

3月23日には経済に関心のある者にはきわめて興味深い高雄加工出口区を見学した．このことにかんたんに触れておこう．約20万坪の土地が高い塀をめぐらして隔離され，ここには各国が直接投資をしている．日本の工場も60社あまりあり，製品は輸出することになっている．4万人の従業員（台湾人）によい作業条件での雇用のチャンスを与えるのが主たる目的である．区域内には役所の出張所や台湾銀行の支店まであり，この計画は非常にうまくいっているので



澄清湖畔の中興塔

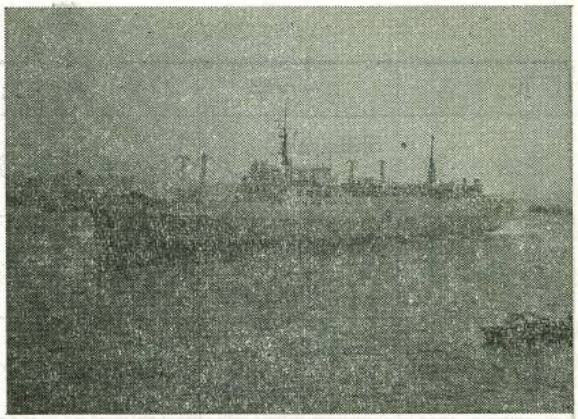
台南にも計画中とのことである．加工出口区見学のあとは人造湖である澄清湖周辺を遊覧，これは写真をみていただくだけにとどめよう．

船は神戸に向う（3月24日～3月27日）

長かった船旅もいよいよ終わりに近づいてきた．三好達治のうた「春の岬　旅のをわりのかもめ鳥　うきつつとおくなりにけるかな」，若山牧水の「白鳥は悲しからずや空の青，　海の青にも染まずただよう」，日本が近づくにつれて，このようなものうい気分になる．ここらで私自身のうたの出てこないのが鈍才の悲しさである．

次第に日本のニュースもはいってくる．まず息子が公立高校に入学できたという電報．おり返し「ホッカイド　リヨコ　オーケ」の返電を打ってやる．また，船内新聞のトップ記事に「阪大不正入試」とでかでか出たので，「えらいことになりましたなあ」と声をかけられるたびに，肩身の狭い思いをしなければならなかった．

沖縄よりはかなり西を進むので途中ほとんど島影をみなかったが，26日の朝には九州南部に近づき，まず，右手に口の永良部島，左手にはそそり立つ硫黄島（鬼界が島），この島が噴煙を吐いているのにはおどろいた．こんなところに活火山があろうとは．われわれは大隅諸島のまん中を西から東へ横切っているのである．そ



神戸港に帰ってきた「さくら丸」
（長男撮影）

の右隣りが竹之島．やがて右手に全島高山の大きな屋久島．つづいてこれはまたやたらに平たくて長い種が島．9時頃には左手に黒々と大隅半島，そのむこうに開聞岳が望まれる．ロビーのテレビには日本のテレビが写っている．いよいよ帰ってきたなあ．

空はどんより曇り出し，遙かに志布志湾方面が霞んでみえる．土佐湾沖ではふたたび陸と遠ざかったが，夜の9時頃には，雨にけぶるはるか彼方の暗夜に，室戸の灯台と街の灯がかすかに望まれた．心なしか船はとり舵気味，いよいよ紀伊水道にはいるわけである．船の窓から真夜中まで暗い波間と沿岸の灯をみつめ，日の岬の灯台までは覚えていたが，いつかうとうと眠りに落ちた．　（以上）